
海老

いえやす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海老

【ZPDF】

Z6671D

【作者名】 いえやす

【あらすじ】

街頭アンケートに協力した男の話です。

アンケートにご協力ください。

お仕事はされてらっしゃいますか？

ご友人は多い方ですか？

ご同居のご家族はいらっしゃいますか？

メールの着信、電話の着信は多い方ですか？

最後のもう一つ。

海老、お好きですか？

1

「アンケートにご協力お願いします」

職安からの帰り道、いきなり目の前に差し出されたピンク色の紙に面食らった。

顔を上げると二十代半ばくらいの女の人が僕の目を覗き込んでいた。二人の顔の距離の近さにもう一度驚いた。

彼女はにつこりと微笑んだ。

「お忙しいですか？アンケートにご協力いただけませんか？」

黒いパンツスーツの似合うスマートな女人。

肩までのストレートの髪がさらさらと揺れていた。

かわいい。

そう思つたとたん自分の顔が真っ赤になるのを感じた。

女人に、それもこんなにかわいい人に間近で話しかけられたのはずいぶんと久しぶりのことだった。

2

慌てて彼女の視線から逃れて歩き出そうとしたが、彼女は畳みかけるように話し掛けってきた。

良いカモだと見破られたのかも知れない。

「すいません。是非お時間いただけませんか？
アンケートにご協力いただいた方には抽選で豪華な賞品も当たることになっているんですよ」

うさんくさい。

宗教かセールスに違いない。

頭ではそう分かっているのに彼女から目をそらせなかつた。
邪氣の無い子供のような笑顔。

なんていう香水を使つているのだろうだろうか？

彼女が動くとうつとりするよつな良い匂いが辺りに漂つた。
気が付くと僕は近くのビルの一室に連れ込まれていた。

白いパーテイションに囲まれた殺風景な小部屋。

一人椅子に腰掛けながら、また引っかかってしまったため息が
出る。

これまでどれだけ被害にあつてきたことか。

綺麗な女性に目が眩み、のこに着いて行つては恐そのお兄さん達に囲まれる。

そういう酷い経験を何度も学習できない自分が嫌になる。
誰か来ない内に出て行こうと腰を上げかけたとき、やつきの人
飲み物のお盆と一緒に入ってきた。

「すいません。お待たせしました。

お忙しいところ本当にありがとうございます。

簡単なアンケートですので十分くらいで終わりますから。

よろしくお願いいたします。

とりあえずリラックスして、こちらをお飲み下さい

彼女はそう言いながらアイスコーラーにたっぷりのミルクとガムシロップを入れて差し出してきた。

僕は一旦浮かせた腰を降ろしもじもじと礼を言った。

「あ、私、桜井と申します。よろしくお願ひします」

彼女、桜井さんはにっこり笑つて名刺を差し出した。

『赤海老港　観光課　桜井倫子』

「……あかえびみなど？」

「『存じないですよね？』

実は去年名前を変えたばかりなんです。
それまで単なる漁港だったところを観光地にしようと力を入れて。
名前からおわかりだと思うんですが、赤海老っていう海老が名産なんですね」

向いあわせに座つているテーブルはずいぶん小さくて、桜井さんの息が顔に掛かりそうで僕はざきまきしていた。

桜井さんは口籠もつていてる僕を真つ直ぐに見詰め、熱心に喋りつづけていた。

「普通の海老って生きているときは赤くないじゃないですか。
でもこの赤海老は海の中にはじから綺麗な赤色をしてるんですよ。

それはもう鑑賞用にしてもおかしくないくらい綺麗なんですね。

それにとっても美味しくって。

一度食べたら絶対に病みつきになること間違いないです。

刺し身でも茹でても焼いても揚げてもなんでも美味しいだけ
ます。

私も大好きなんです。毎日食べても飽きない味で。
私がここに就職したのもこの赤海老の綺麗さと美味しさに感動し
たからなんです。

皆さんにも是非赤海老の綺麗さと美味しさを知つて欲しくつて。
……でも、残念ながらまだまだ宣伝不足なんですね。
どういう方法でアピールしていけばいいのかいろいろ調べて
んです。

それでこのアンケートなんですが……

桜井さん席を移動し僕の横に寄り添つようになら
柔らかい優しい香りに頭がくらくらしてきた。

「お名前は？」

「あ、阿久津です」

「素敵な『苗字』ですね。お年はおいくつになられますか？」

「二、今年で二十五になります」

「そ、うなんですか？ 奇遇ですねえ。私も同じです。
……ところで……」

桜井さんは一息間を置き、僕の方を向いた。
自然と田と田が合い見詰め合つ形になつた。
僕の顔のほんの十センチのところに桜井さんの顔がある。

「海老ってお好きですか？」

僕は「ぐつとつぱを飲み込んだ。

「……え、え、海老ですか？……ええ、だ、大好きです
それを聞くと桜井さんはこれまでよりさらにぐつわしそうな表情で
にっこりと笑つた。

「ありがとうございます」

2

「阿久津さんですか？

私、桜井です。

先日はアンケートに「協力いただきまして本当にありがとうございます」と
いました。

覚えてらっしゃいます？」

深夜に近い時間の電話。

桜井さんの声を聞いたとたん、あの何とも良い香りがあざやかに
蘇つてきた。

「ど、どつも、お久しぶりです」

返事に力が入る。送話口に手を当て荒くなっている息を聞かれま
いとした。

「思い出してくださいました？」

お電話遅くなつてしまませんでした。お元気でしたか？」

桜井さんはあいかわらず明るく優しい。

営業用の愛想の良さに違いないのに、僕はついにかを期待してしまった。

「それで、今回お電話差し上げましたのは他でもないんです。アンケートにご協力いただいた皆さんの中から抽選をさせていただきました。

その結果、阿久津さんがご当選されましたので、そのご報告です。おめでとうござります！」

「当選、ですか？」

ちょっとだけ防衛本能が働いた。

当ったとか、当選した、というのは非常に危険なキーワードだ。以前訪問販売で売りつけられた高級羽根布団をクリーニングオフしたときに、お世話になつた消費者センターの人にそう言われた。

「そうなんです。

でも当選したと言うのはちょっとがうつかも知れませんね。

先日もお話をしたように、私のいる赤海老港観光課では試験的にいくつかのツアーを企画しております。

その中の一つに是非ご参加いただきたいんです。もちろん全て無料で

無料ほど高いものは無い。
確かそうも注意されたような気もする。

「ただ、いいことばかりではないんですね。
ぶっちゃけて言いますと、今回のツアーは二十代三十代の男性の

方の「」招待になつてます。

残念ながら女性の方の参加が無いんです。

といいますのも今回の「」のツアーは、海老の食べ放題を売りにしよつと思つてまして。

その場合特に問題になりそなのはやはりお食事に「」へりへりの経費がかかるかということですね。

せつから企画しても赤字では困りますし。

そこで設定金額をサンプルするために、特に食事の量にこだわりのある方を今回選ばさせていただいたんです」

なるほど、たくさん食べそうな意地汚い男を選んだわけか。自分にお鉢が回ってきたことに関しても少し納得ができた。

「それで、いかがでしょか？」に参加いただけませんか？」

「えつと、僕、ちょっと人見知りする方なんで」

「そこをなんとか。是非」

「そうですねえ……。桜井さんも行かれるんですか？」

言つたとたんに後悔した。

調子に乗つて質問してしまつたが、なんてばかなことを聞いてしまつたんだろう？

壁に掛かっていた鏡に目が行く。

真つ赤な顔をした僕が、小太りの男が映つていて。

それを見たとたん浮かれかけていた気分が一気に萎んだ。

本当に馬鹿な僕。

桜井さんはあくまで営業目的で電話をかけてきているんだから。本気で僕の相手をしてくれるわけがないんだから。

「もちろんですよ。

私が皆さんの、阿久津さんのお世話をやせたいただきます」

いかにも嬉しそうに言つて桜井さんと、僕の全ての警戒心は吹き飛んだ。

「じゃ、じゃあ、行きます。参加します」

「ああ、よかったです。ありがとうございます。精一杯お世話をさせていただきますね」

桜井さんはほっとしたように言つた。

その安堵のため息に、やつぱり営業か、ノルマなのか、とこう思ひを感じないわけではないのだが。

まあいいや。

もう一度桜井さんに会えるなら、それだけでもうれしい。

「それで、確認なんですが、阿久津さん以前と比べて、体重とか落ちてらつしゃしませんか？」

今回「」参加の方には体重の下限制限があるんですね

「……珍しい制限ですね。それ。

変わつてないです。八十五キロくらいです」

電話の向こうで桜井さんが電卓かなにかを叩く音がした。

「それなら大丈夫です。問題ありません。本当にありがとうございます」

「います」

桜井さんはまたまた安堵したよつて言つた。

「とりあえず、パンフレットお送り致しますね。

阿久津さんとまたお会いできることを楽しみにしていますから

『赤海老漬 海老食べ放題ツアーハイ

14：00 駅前集合

14：30 貸し切りバスにて赤海老港へ

18：00 赤海老港から赤海老丸に乗船

19：00 デッキにて夕食（海老料理食べ放題）・夕食後船

内で一泊

08：00 赤海老港に帰港

08：30 朝食

09：30 貸し切りバスにて帰宅

12：00 駅前にて解散

桜井さんから電話があつた翌日にはもう旅行のパンフレットが届けられた。

ハートマークの添えられた『楽しみにしています』という手書きのメッセージを僕は何度も読み直した。

桜井さんにとって仕事の一環なのだろうけど、それでも今の僕にとつてそれはめったに無いことだった。

ここ最近桜井さんのように向こうから笑つて話し掛けてくれる女人なんて僕の周りには一人もいなかつた。

ファーストフードの店員にだってスマイルを出し惜しみされてい るような気がしていたのに。

騙されているのではないかという疑心もまだ確かにいるけど。

でもそれよりもなによりも、勘違いでもいいからもう少しだけ桜

井さんにかまつて欲しい。

やさしくして欲しい。

だけど、僕には一つ大きな心配がある。

実は僕は桜井さんに一つだけ嘘を付いている。

僕は実は……。

実は海老が嫌いだ。大嫌いだ。

甲殻類アレルギーで海老なんか食まつたく食べられない。

そんな僕が海老食べ放題ツアーに参加なんかしていいものなんだらうか？

桜井さんをがっかりさせやしないだらうか？

3

出発当日、集合場所に着いたとき僕は軽く失望していた。
平日に泊りがけで行くというのに、こんなにも参加する人がいる
なんて。

駅前の広場には四十人くらいの男、それも皆僕以上の「テブばかり
だった。

この異様な集団に通行人も遠巻きに不信の目を向けていた。

「『』参加ありがとうございます」

桜井さんが、周りの「テブ男達の間を巡つては皆に挨拶をして回つ
ている。

そしてこのまま帰ろうか躊躇しようか悩んでいる僕を見つけて声
をかけてきた。

「あ、阿久津さん。

今日はご参加いただけてありがとうございます。

ちょっと到着までにお時間がかかりますけど、おいしい海老たっぷり用意してありますから、楽しみにしてて下さいね」

桜井さんの笑顔に僕もつい笑顔を返してしまった。
海老なんか食べられないといったのに。

バスは大型のサロンバスだったが、乗客の体型が規格外のためかゆつたりというわけにはいかない。

桜井さんは相変わらずにこやかな笑顔のまま乗客の間を忙しそうに走り回っている。

時々は僕にも微笑んでくれている。
やつぱり可愛いなあ。

さつきまでの後悔は消えて桜井さんの笑顔をもう一度見ることが出来ただけでもここに来た甲斐があつたと思い始めた。

「良い女だよなあ」

隣りの男が下心満載の発言をした。
富崎という男だ。斜に構えた感じのする男だった。
だけどテープが斜に構えてもねえ。
勘違い富崎はいろいろ話し掛けてきたが、僕はあまり相手にせず生返事を返していた。
僕のそつけない反応を氣にも止めず富崎は桜井さんの背中をじとつと見ていた。

「良い女だよなあ」

繰り返し富崎は言った。

「ここだけの話、あいつ俺に氣が有るんだぜ」

びつくりして富崎の顔をまじまじと見た。

得意げな三白眼の細目が歪んでいる。

今時なんだと思つような分厚いメガネ。

生白つくて丸く太つた顔。

身長は僕よりわずかに高いだけなのに体重は少なくとも五十キロは多いはずだ。

参加メンバーの中でも一番の「ゲブ」。

外見的には頭のてつぺんから足の先まで「」をどつみても好きになれる要素がない。

その上僕の方が年下だとわかつたとたんに偉そうに上から話掛けてくる態度も気に入らない。

「桜井はさあ、俺には是非参加して欲しいって言ってたんだ。
俺はこいつの興味ないから断つてたんだけど、あんまりこいつこいからやあ。

まあ、いやいやながら参加してるんだけどな」

富崎はにんまりして優越感たっぷりだった。
どうしてそんなに自信過剰になれるのか不思議なくらいだ。
あの桜井さんが富崎のことが好きだなんて、そんなことあるわけがない。

そういうながらも口には出せなかつた。

「あこつああ、多分デブ専てやつだぜ」

富崎は馬鹿にしたように笑つた。

天につばを吐くとはこのことだらうか。

本当に嫌な奴だ。

でも、でも、もしかしたら本当にやうなんだらうか？

桜井さんはデブ専なのだろうか？

いやいやこんなこと考え方や桜井さんに失礼だ。
でも、電話の時もこっちの体重をやたらと気にしていたつけ。
だったらもし富崎みたいに太れれば、もっと体重を増やせば桜井
さんは僕のことを相手にしてくれるんだろうか？
そんなんだろうか？

いつの間にか眠っていた。

バスに乗っていた他の乗客も皆眠りこけていたようだた。
目を覚ますとどこだかよくわからないが港に着いていた。
日はもう沈みかけていて窓から見える港は暗かつた。
灯りも人気も無い。
やけにさびしく見える港だ。

「お疲れさまでした。

途中渋滞にはまってしまいまして少し遅れましたが、ほぼ予定ど
おり赤海老港に到着いたしました。
外に見えるのが赤海老丸になります」

薄暗い港の中に黒い船影があつた。

今日はあそこに泊まるのか。

「予定では、このあと赤海老丸のデッキで、夜景を眺めながら、
海老食べ放題の夕食になります。

皆さん船の中のお部屋にご案内致します。

一旦休憩していただいて、デッキに集合お願いたします」

船はそんなに大きくなかった。

船中泊と聞いていたので勝手に客船を想像していたのだけれど、
もそろではないようだった。

不安げな顔をしていたのが桜井さんの目に留まつたらしく、「ひそり話しかけられた。

「『めんなさい。阿久津さん。ちいさな船で。』
もつと大きな船を用意したかったんですけど、まだ企画中のツアード予算があまり下りてくれなくて……。
ですけど食事の方はしっかりしてますから、すいませんが我慢して下さい。お願いします」

桜井さんの困ったような微笑みに、なんだかより親しくなれたみたいでうれしかった。
港の強い潮の匂いに混じつて桜井さんの甘い匂いがふわっと漂つてきた。

「大丈夫です。
僕『こうこう』船に乗るの始めてなんで楽しみです」

「そうですか？」

「そう言つていただけると私も多少は気が楽です」

予想通りというか、予想以上に部屋は狭かった。
普通体型以上の男が2人で使うような部屋ではない。
行つたことはないがカプセルホテルというのはこんな感じなのかもしれない。

「本当に狭いなあ」

「」でも同室になつた面崎はぶつぶつ文句を言つぱなしだ。
部屋は船の底の方にあつた。

デッキから急な階段を降りると狭い廊下が一メートルくらいの

びている。

左右に一人部屋が各十室。計二十室あった。

部屋といつても壁のにめり込んだ一段ベッドの窪みにドアが付いているようなものだつたが。

上段のベッドに昇る足場として、わずかに床があり、取り外しのできるハシゴが付いていた。

しかも狭いだけではなく、船の下方とこうこともあり窓一つ無い。換気扇は回っているが閉所恐怖症の人はとてもここにはいられないだろう。

ベッド以外のスペースがほとんど無いのでテレビも無いし風呂もシャワーもない。

いくら無料の招待とはいえこれはないんじやないかとさすがに僕も不満を覚えてきた。

だつて、狭い船底に総勢四十人のデブの男なんて。それを想像するだけで暑苦しいし息苦しくなつてくる。

「本当にごめんなさい。狭い思いをさせてしまつて」

桜井さんが顔を出した。深々と頭を下げて謝つた。

「本当はもつと大きな船の予定だつたんですけど、なにか手違いが合つたみたいで」

「いいよ、一晩だけなんだろ」

さつきまでぶつぶつ言つていたくせに富崎は鷹揚に返事をした。

「申しわけ有りません。富崎さん。阿久津さんも。もつすぐ食事になりますから、テッキの方にお集まり下さーね」

桜井さんは各部屋を回つて同じよう謝つてゐるよつた。

宮崎がなつという感じで僕に田配せをしてきた。

でも桜井さんの態度、そんなにおかしなものだつただろうか？
桜井さんが宮崎のことを好きだなんて、デブ専だなんてきっと宮崎の勘違いに違ひない。

そうとしか思えない。

館内放送が流れ、船が港を離れ夜の海に出発した告げた。

4

デッキの食堂は船底の部屋と違ひ広く立派な造りだつた。
もうすっかり夜になつていて、窓からどこかの街の夜景が見えていた。

食堂の中には丸いテーブルがいくつもセッティングされ既に前菜が運ばれている。

海老のカクテルソース、海老のサラダ、海老のムース、海老のテリーヌ、海老の和え物……。

海老を使った冷菜がテーブル一杯だつた。

そしてそれを見たとたん僕は身体がむずがゆくなつてきた。

皿にサラダを申しわけ程度に盛りつけ、野菜だけでも食べようとしたが、ドレッシングにも海老のエキスが使われていることを聞かされてフォークを置いた。

料理は次々と運ばれてくる。

海老のソテー、海老フライ、海老グラタン、海老のマヨネーズ焼き、海老のチーズフォンデュ……。

煮物蒸し物焼き物揚げ物に至るまで海老オンリーの食事。

「実は俺、海老つて苦手なんだよねえ」

同じテーブルで隣りに座っていた僕と同じ年くらいの男が「」そつとつぶやいた。

男は久保田と名乗った。

割と暗い感じのするメンバーの中で、妙に元気な感じのする男だつた。

体格は僕を一回りくらい大きくした感じだ。

しかし久保田の方はなにか本格的に運動をやっていたらしく、手足の太い柔道部出身のような体型だつた。

肩幅が広く胸が厚く、着ている今風のジャージがやけに似合つて見える。

髪もソフトモヒカンといつやつだらうか。

「じゃあなんでこんなツアーパーに参加したんですか？」

「いやあ、やつぱりかわいいじゃない？倫子ちゃん」

久保田が「」で指した先にはもちろん桜井さんがいた。
桜井さんは富崎のテーブルにいた。空になつたコップにビールを注いでいる。

富崎はテーブルのひとつを一人で独占しており、それこそ山のような海老料理をものすごい勢いで平らげていた。

それを嬉しそうに見つめる桜井さん。

桜井さんは大食いの人気が好きなのか？
やはりデブ専なのか？

「いやね。実は俺の場合、」うちの方から倫子ちゃんをナンパしてさ。

つい調子を合わせてたら「」ことになつちゃつたんだよねえ

久保田は陽気に笑つてビールグラスを空けた。

「倫子ちゃん、上手いんだよねえ。

氣があるそぶりっていうの？思わせぶりな。

……是非招待したいって言うから、もつと色氣のあるツアードと勝手に思つてたよ。

それがここまで殺伐としたツアードとはねえ

久保田は自嘲氣味のため息をついた。

僕もつられて周りを見回す。

僕と久保田以外はみんな海老が大好きらしくおそるべき大食漢ぶりを発揮していた。

ただひたすら無心に食べづけるだけの約四十人のデブの男。確かに見ていて心が和むものではない。

「まあ、それでも酒が無料ってだけでも良しとしなきゃあねえ。……それに今夜は時間が有りそうだし、もつもつじっくりと倫子ちゃんを攻めてみようかなあ

久保田はまだ桜井さんのこととあきらめではないみたいだった。

うらやましい。

僕には無理だ。

例え何か用があつても気軽に女の人に声をかけることができないんだから。

久保田のようなバイタリティも富崎のような過剰な自信も僕にはない。

黙つて指をくわえていることしかできないんだ。きっと。

諦め氣分ですきつ腹にビールをちびちびちびやつていうと当の桜井さんがやってきた。

「大丈夫ですか？お口にありますか？

久保田さん、阿久津さん。召し上がってらっしゃいますか？

心配そつに顔を覗き込まれた。
まずい。嘘がばれる。

「いやあ、おいしいよお、この海老。本当に

久保田がいきなり調子の良い大声を出した。
見るとさっきまでまったく手を付けていなかつた久保田の皿は空
になつていて、代わりに僕の皿の上にそれが積み上げられてくる。
こいつ他人に押し付けやがつて！

「本当に上手いー最高ー赤海老最高ー」

久保田は調子良く続ける。が。

「じゃあめんなさい。実はこれ赤海老じゃあないんです

「へつ？」

久保田が間の抜けた声をだした。

「実は赤海老は今は品薄になつてまして。

これは赤海老と似ているんですが、黒海老つていいます

「黒海老、ですか？」

赤海老もそつだがまったく聞いたことが無い。
「いらっしゃりあたりの俗名なのだろうか？

「そうなんです。

赤海老とよく似ていますけど、実は黒海老の方が希少品なんですよ。

養殖でしか手に入らないんですが育てるのがとっても難しくて

「そうなんだ。美味しいよこれも。ホント!」。

黒海老最高!

……でも残念だなあ、赤海老も食べてみたかったなあ

久保田は黒海老を一切れ口の中に放り込むと心中にも無にして言つた。

多分このツアーが終わつた後に繋げようとこうつ魂胆なのだひつ。

「明日の朝には入荷しますよ。赤海老」

桜井さんが嬉しそうに言つたので、久保田はぐつと喉を詰まらせた。

「私もほつとします。赤海老はこここの名産です。
切らすわけにもいかないですから」

「赤海老も養殖なんですか?」

「いえ、赤海老は漁で、罠を仕掛けて採るんです

「へえ、でもそんなに人気があるならすぐ無くなっちゃうんで
しうねえ」

「そうですね。

またすぐ次の漁の準備に取り掛からないといけないですね。

でもまあ今回ばかりは4トンか4.5トンは入荷されそうだから。
しばらくは大丈夫だと思いますよ。

ああ、そうでした。

お一人とも、赤海老まだ見たことないですよね。お見せしますね

桜井さんは部屋の隅にお置いてあった小さな水槽を持ってきた。

「これが赤海老です。綺麗でしょ?」

桜井さんはうつとりとした表情で水槽を覗いた。
砂と置物で海中を再現した水槽には体長十五センチくらいの2匹

の赤い海老がいた。

確かにこれまで見たことの無いような真っ赤な海老だ。

南海の熱帯地方の生き物のよう。

その透明感のある赤さは、まるで深紅のガラスで出来たイミテーションのようだった。

「綺麗ですねえ」

思わず僕も、久保田も見入った。

「でしょ?光に当ると宝石みたいに輝くんですよ」

桜井さんは子供のように歎美げだったが、急に笑顔のまま眉をひそめた。

「ところで阿久津さん、まったく召し上がっていらっしゃらないんじゃないですか?」

「いや、もうお腹一杯食べました。今は一休みしていたところです。

……これから、また、食べます

慌てて言つたが見え透いた嘘だつた。
ばればれだ。こんな通じる訳が無い。

「そうですか……。

それなら良いんですけど。

せつかくのお料理ですので出来るだけ召し上がって下さいね

残念そうな表情で桜井さんがテーブルを離れていくと、久保田はビールで口の中をゆすぎはじめた。

先程一口食べた黒海老が気になるらしい。

僕は小さくため息を付いた。

やつぱり来ない方が良かつたのかもしれない。

桜井さんのあのがつかりしたような顔。

僕のせいであんな顔をさせてしまった。

自分で自分が嫌になる。

結局最後まで海老の入つてない料理は無いまま、食後のアンケートが配られた。

味の評価は五つ星にしておいた。

僕と久保田以外のメンバーはみんなその体格に違わずその身体に海老を詰め込んで膨らました腹をさすつていた。

狭い階段を一列に並んで船底に降りていく様は滑稽というより、どこか不気味な感じすらする。

部屋に戻ると、富崎が悪態を吐いていた。

「なんだよ。最低のツアーダよな。
こんな狭いところに押し込められて。
携帯も使えやしない。

それにあの海老。ぱさぱさして不味いのなんの。
あれで客を呼ぼうつてのが間違つてるよ。

最悪だよ

食事の時、全員に対し愛想の良い桜井さんを見て、さすがに宮崎も自分の勘違いに気づきはじめたようだつた。

僕に一言の断りも無しに、広い方の下段のベッドに寝転がりぶつぶつ言つてゐる。

宮崎が文句とともに吐き出す息には強い海老の臭いが混じつていて。

僕は宮崎の悪態にもその臭いにも我慢できなくなつて廊下に出た。が、廊下にも他の部屋からの海老臭が漂い出てきていて、耐えられそうになかつた。

僕は外の空気を吸いたくなり、一人デッキに上がつていた。デッキの食堂には桜井さんがまだいた。テーブルに一人座りながら書き物をしている。

声をかけようか躊躇しようか迷つていたら先を越された。

「んばんわー!倫子ちゃん」

久保田だつた。

久保田は桜井さんの背後に忍び寄り後ろからわざと脅かすよつこ声をかけた。

桜井さんはびくつとして振り向いた。

僕はそつする必要も無かつたが慌てて身を隠した。

「ああ、びっくりした。脅かさないでくださいよ。

……久保田さん、なにかご用ですか?」

振り向いた桜井さんは、笑つていなかつた。

そういえば笑っていない桜井さんを見るのは始めてだったことに気がついた。

久保田もそうなのだろう。

桜井さんの射るような視線にお調子者も一の匂が告げないみたいだった。

「いや、その、あの……」

「用がないんでしたらお部屋にお戻り下さい」

「いやあ、お時間有つたらちよつとお話しでも……」

「うめんなれ。今はプライベートな時間なんで」

丁寧だが断固とした口調だった。

そのきつぱりとした物言いに、久保田も退散するしかないようだつた。

結局桜井さんの愛想の良さは営業だった。

わかつていたつもりだったが、それを田の当たりにしたのはショックだった。

もちろん自分みたいな無職のデブが桜井さんみたいな可愛い人に好かれるとは思つてはいなかつたけど。

やつぱり来なればよかつた。海老も食べられないんだし。

部屋に戻ると、灯りをつけたままで富崎はすでに眠つていた。

酒のせいか真っ赤な顔でいびきをかいしている。

先ほどまで腹いっぱいで苦しいとかいつていたのに。いい気なもんだ。

富崎はどこかかゆいのか寝ながらも首筋や腕をぼりぼりかきむしっていて。

それを見ていると僕まで身体がかゆくなつてしまつた。

一回たりとも口にしていなかつたのに、夜中にから皮膚を通して海老のエキスが浸透してきてもおかしくない。

そう思えるくらいこの部屋も廊下も海老臭い。

だけど他にいるといふも無いし。

仕方なく上段のベッドに昇つた

船内はとても静かで、富崎のいびき以外なにも聞こえなかつた。部屋の灯りを消してそのまま横になつてゐとなぜか急に眠くなつてきた。

おかしい。こんなに早い時間に。

ぼんやりした頭の片隅に芽生えた小さな疑問を検証する暇も無く、僕はすぐに眠りに落ちた。

5

誰かに呼ばれたよつた気がして目を覚ました。

しばらくそのままぼんやりしてゐると、一段ベッドの下から富崎の声が聞こえ、よつやかに船の中であることを思つて出した。

「……おーい、……おーい」

小さな弱々しこ声だった。

富崎の声だと思つととたんに嫌な気分になる。

寝言だらうか？ こんな夜中の人騒がせな。

「……おーい」

呼ぶ声は止まらない。あまつのしつこい僕は声を荒げた。

「なんですか？ こんな夜中に」

「阿久津か？よかつた。頼む、たすけてくれ。頼む」

声はどじまでも弱々しかつた。
さすがに少し心配になり、ベッドから降りて灯りを点けた。

「どうしたんですか？宮崎さん」

「阿久津、頼む助けてくれ」

宮崎は頭を枕の上に乗せて非常に儀良い姿勢で寝ていた。
毛布を首の下まできつちりとかけ、顔はまっすぐ上を向き顔をこ
ちらを見ようともしていない。

なんだこいつは？

悪ふざけかもしれないと思つとよけいに腹が立つ。

「身体が、からだが、かゆいんだ。それに身体が動かないんだ」

「身体が動かないって、どうしたんですか？病気ですか？」

「わからん。ただ動けないんだ。それに全身がかゆい」

正直面倒くさかった。

でも宮崎は真剣な表情で目だけを動かして僕を見ていた。
半分泣いているみたいだつた。

「……首も動かないんだ」

食中毒でも起こしたか？

食べ過ぎで腹でも壊したか？

いざれにせよいい氣味だくらにに思つてゐた。

「なあ、俺どつしちまつたんだよ。なあ、助けてくれよ。なあ」

もし本当に病氣なら誰か呼びにいかなくてはいけないけど。
誰かといつても桜井さんしかいなければ。

僕は久保田に向けられたあの冷たい視線を思つ出した。
あれを自分が受けるのは嫌だつた。

改めて富崎の顔を見てみたが特に顔色が悪いといつことはない。
むしろつやつやして血色の良いくらいだ。

へんな汗もかいていないし。

身体が動かないといつのも氣のせいではないだらうか？

「しつかりしてください。大丈夫ですよ。なんともなつてないで
すから」

僕は落ち着かせるように言つたが、富崎は納得せずに食い下がつ
てくれる。

「そつか？ 本当に大丈夫なのか？
なんともなつてないか？
俺の身体は大丈夫なのか？」

富崎のしつこにいゝ多少うんざりして彼の毛布に手をかけた。

「大丈夫ですよ。ほら、なんともなつてな……」

突き出た腹で大きく膨らんだ毛布をめぐり富崎の手足や胴体を一
応確認してやるつもりだつた。
だけどそれはできなかつた。

なぜならそこに富崎の身体はなかつたから。

富崎の太つた体も手足も毛布の中には見当たらなかつた。
代わりにあつたのは赤い小石の山だつた。

毛布の中一杯に山のよつに盛られた赤い小石があつた。
毛布をはがしたことで、まるで渴いた砂山が崩れるよつに赤い小石がベツドから崩れ落ちてきた。

ざざざざざと音を立てて崩れ落ちる赤い小石は床に流れ僕の足を足首まで埋めた。

とつさに避けることも出来なかつた。

「おい、阿久津、どうしたんだ？ 僕大丈夫なのか？
大丈夫なんだよな？ おい、阿久津、返事をしろよ」

富崎の声は聞こえていたが返事は出来なかつた。
僕は赤い小石の山を見つめていた。

毛布の中からこぼれ落ちて自分の足首を埋めている赤い小石のよつなもの。

一つ一つが『つ』の字型で透き通つた深紅のガラス細工のよつに見える小石。

じつと見ているとそれらはぴくぴく動きはじめた。
ぴちぴちと跳ねるように動きはじめたそれは、そう、夕食の時水槽の中で見た赤いやつだ。

海老だ。

あまりに大量だつたのですぐにはそれと気づかなかつたが。

富崎の毛布の中になつたのは赤い海老だつた。赤い小石じゃなく赤い海老だつた。

何千匹もの真つ赤な海老。

それを理解したとたんに背中に冷水を浴びせられたように正気に戻つた。

うわつという低い叫び声を上げて、足にまとわり付く海老を払い、戻つた。

うわつという低い叫び声を上げて、足にまとわり付く海老を払い、

狭い床を脇に飛びのいた。

「おい、阿久津、どうしたんだよ」

ベッドの上の枕には富崎の首がある。
さつきと同じように行儀良く、まっすぐに上を向いて。
でも毛布をはがされた首から下にはなにもない。
腕も、胸も、腹も、足も。なにもない。
あるいは海老だけ。

「おい、どうしたんだ。阿久津。
どうしたんだ。なんとか言つてくれよー。」

富崎は喋つている。

富崎は自分の体が無くなつてゐることに気が付いてない?
いや、そもそも身体が無くなつてゐるのに生きている?
首だけ
で?

これは夢だ。悪い夢だ。

僕は富崎の首のそばに近寄つた。

「どうしたんだ! 阿久津。何とか言つてくれ。
おい、おい、何するんだ! やめろ。やめてくれ」

僕はなにかに導かれるように枕の上の富崎の首を持ち上げた。
ちよつと自分の顔と同じ高さに。

「阿久津。なんなんだこれは。これはどういとなんだ」

富崎がしゃべると、顔の筋肉が動く。

その動きにあわせて首からぼろぼろと赤い小さな塊が白いシーツ

の上にこぼれていった。

白いシーツの上でピンピン動く赤い海老。

海老は富崎の首からこぼれ出でてくる。

そして、海老がこぼれる度にその分富崎の首は短くなつていく。

「なあ、阿久津頼む、俺の首を搔いてくれ、かゆくてかゆくてたまらないんだ」

富崎は海老に食われているんじゃない。

富崎が海老になつてているんだ。

富崎の肉が、骨が、全てが細かく分解して、少しづつ赤い海老になつてているんだ。

「おい、阿久津。頼む」

そのことにやつと気が付いたとき、僕ももう限界だった。

富崎が恐かつた。

富崎の首からこぼれてくる赤い海老が恐くて恐くてたまらなかつた。

「へ、へ、へ、うわ、うわ――――――・・・・・・

僕は叫んだ。そのまま両手でもつていたものを思いつき壁に向かつて投げた。

富崎の首を投げた。

首は案外軽かった。もうかなり海老化が進行していたのかもしない

「おい、あく・・・・・・・・

富崎の首は壁にぶつかると、大きな豆腐か何かのよつこじゅつとこりしめた音をたてた。

そしてそのまま粉々に砕けて弾けるよつこじゅつ飛び散った。

数千もの赤く小さな破片。

その一つ一つがそれぞれ赤い海老へと見る見る変化して、床の海老に混ざつていった。

もう後には富崎のかけらも残つていない。

急に吐き気がこみあげてきた。

だけどからっぽの腹からは何も出でこない。身体を折り曲げ空吐を繰り返した。

わあわあ　わあわあ　わあわあ　わあわあ　わあわあ　わあわあ

気が付けば赤い海老は床一杯に広がり、僕の足首まで埋めていた。また悲鳴を上げそうになるのをあと一步でこらえた。

ここでパニックを起こしては駄目だ。

畜生、富崎なんて放つておいて早く逃げればよかつた。

ああ、後悔してももう遅い。

とにかくここから出るんだ。ここから出て足を洗つんだ。外開きのドアを開け、廊下に飛び出した。

デッキへの階段まで廊下を走ろうとして足が止まつた。

僕のいた部屋はデッキへと昇る階段から一番遠くの部屋だった。階段までの廊下の左右にはそれぞれ10個づつ部屋がある。

田の前の廊下で、別の部屋のドアがいくつか開いていた。

そしてそこから海老が、ドアの開いた部屋から真っ赤な海老がどんどんびん廊下にあふれ出していた。

わあわあ　わあわあ　わあわあ　わあわあ　わあわあ　わあわあ

両手で口を押さえたがもう今度は悲鳴を止められなかつた。

何十万匹という赤い海老が恐ろしいほどの勢いで廊下に流れ込んでいる。

狭い廊下は見る見るうちに海老で埋め尽くされていく。

赤い海老は電灯を反射しそれ自体が発光してるように赤く輝いていた。

輝く赤い波がうねつて押し寄せてくる。

このままではすぐにここは赤い海老に飲み込まれてしまうだろう。早くここから逃げるんだ。

海老に触りたくないとか言つていられる状況ではない。

だけど恐くて海老の中に足を入れることが中々出来なかつた。

知らず知らずに涙が、嗚咽が出てきて止まらない。

何度も深呼吸して無け無しの勇氣を全部振り絞つてなんとか一步を進めた。

足に海老がまとわり付いてくる。

冷たく硬いぬめぬめとした感触が伝わつてくる。

海老たちは噛み付いたり刺してきたりはしない。

ただ泥のようにまとわりついて、足を重く、鈍くする。

階段までの距離は後ほんの十メートルくらいのはず。

でもこんな状況では絶望的な距離に感じる。

それでもなんとか前に進む為に泣きながら身体を動かした。そういうことしか出来なかつた。

やつと廊下の半分まで進んだとき、ぱこっと音がしてそれまで閉まつていたはずの部屋のドアが目の前で開いた。

室内の海老の圧力に耐えられなくなつたのだから。

とたんに海老が勢いよくあふれしてきた。

海老の波が大きくうねり一瞬腰の高さまで海老に飲み込まれた。

波の勢いに倒れそうになるのを必死でこらえたが駄目だった。

足をすべらせ海老の波の中に倒れ込んでしまう。

それでも必死に目を閉じ口を閉じて海老を身体の中に入れないと

うこして立ち上がつた。

髪の中や肩に残った海老を振り払い、壁際にすがり付き全身の力で転ばないよう耐えていた。

涙と鼻水と海老の粘液で目を開けていることが出来ない。全身がもうぬるぬるで、拭いても拭いても拭い切れない。海老の蠢く音だけがうるさいくらいに耳に響いていた。

わさわせ わさわせ わさわせ わさわせ わさわせ

霞んだ赤い視界の中、出口の階段に人がいるのが見えた。信じられなかつた。

自分以外にも助かった人がいるんだ。
それに安堵し、今度は嬉し涙が溢れでてきた。

膝まで海老につかりながら最後の力で進む。

「おーーーい！ 開けてくれ、開けてくれよ！」

出口の階段にいたのは久保田だつた。
パンツ一枚の久保田は僕のことなんか目に入らないみたいで、デ
ッキへと昇る階段の途中の鉄製の扉を叩いていた。

「おーーい、いいかげんにしやがーんじこるんだろ。いののはわかっているんだ。

なあ、頼む助けてくれよ。だれにも言わないから！」

「久保田さん、ドア開かないんですか？」

よつやく階段下にたどり着き、海老の海から抜け出すことができ

た。

「おお、阿久津！お前も無事だつたのか？畜生、奴等ドアに鍵をかけているんだ」

「奴等って？」

「決まつているだろ、奴等だよ。桜井だ。あいつら最初からいつすることが目的だつたんだ」

「桜井さんが？うそだ？目的つて？」

「目的？知るかよ。そんなの」

一人とも混乱していた。会話がかみ合わない。どうしたらしいのだろうか？

狭い階段で身を寄せ合つてしばらく一人とも途方に暮れた。でも久保田は僕という生き残りを見つけて少し落ち着きを取り戻したのだろう。

周りをすばやく見回すと意を決して海老の海に飛び込み、そのまま一番近くの部屋に入り一段ベッドのハシゴを取り外して持つてきた。

そのハシゴで扉を叩きはじめた。

ゴン！ゴン！ゴン！

鈍い音はするが鉄扉はびくともしない。

久保田の行動を見て僕も別の部屋からハシゴを持ってきた。一人して何度も何度もドアを叩いた。

ゴン！ゴン！ゴン！

どこから沸いているのか海老は徐々に増えてきていたようだつた。足場にしている階段は7段しか無く、既に下から3段目は海老に沈み、まもなく4段目も海老に埋まつとしている。

足場が不安定になる中、僕と久保田は一人とも何度も海老の海に倒れ込んで立ち上がりドアをハシゴで叩き続けた。

どれくらいそうしていたのか。久保田の掴んでいたハシゴが突然僕の目の前に飛んできた。

「すまん、手を滑らせた」

久保田は僕のほつに右手を伸ばしていたが、その指先を見て僕はぎょつとなつた。

差し出された久保田の指の背中に赤い縞模様が浮かんでいた。

久保田の指が、海老に、海老になりかけている。

呆然としている僕の目の前で久保田の右手の小指がぽろつと落ちた。

落ちた小指は久保田の足元でぴんぴん跳ね始めた。

久保田も同じように落ちた小指を、真っ赤に輝く海老を見つめていた。

驚いている暇も無く今度は中指が、親指が次々と海老に変化した。

久保田はこれ以上指が無くならないよう両手を握り締めたが無

駄だった。

赤い海老が次々流れるようにぼれ落ちてくる。

「あ――！俺の指が、俺の手が。

……阿久津、阿久津、助けてくれ阿久津。頼む

海老はぼろぼろぼろこぼれ、階段下の海老の中に混ざつていく。

もうどうすることもできない。

指が全部無くなると今度は手の甲が、那次は腕が、さうそくが解けるようにどんどん短くなつていつた。

久保田は僕に助けを求めて階段を一段降りてきた。

僕は久保田を避けるように後ずさり階段から降りた。

助けを求める久保田の口から悲鳴とともに赤い海老がぴんぴんと飛び出してきた。

ぱくぱく動く口の中で舌が海老に変わつていくのがはつきり見えた。

舌の無くなつた久保田は喋れなくなり獸のように叫び始めた。それでもう一段階段を降りようとしたとき、階段を踏み外して海老の中に倒れこんだ。

すでに右足の足首から下も海老に変わつていつた。

海老の海の中、久保田は最初はなんとか立ち上がろうともがいていたが、少しずつその動きは小さくなつていつた。

久保田のたくましい四肢が先端から見る見るつりに千匹、万匹の海老に変わつていく。

両手両足を失つた久保田は仰向けの達磨のように海老の海に浮かんでいた。

もうどんな抵抗もできない様子だったが、それでも目だけはまだ生きていることを主張するように必死に助けを求めている。やがて久保田の身体は少しずつ赤く染まり、細かくひびのような模様が入つてきた。

そしてゆつくりフライパンの上のバターが融けるように全身が万匹の海老へと変わり赤い海へと同化していつた。

後には久保田の下着だけが、ネイビーブルーのショートランクスだけが赤く輝く海にゅらゅらと冗談みたいに浮かんでいた。

わさわさ わさわさ わさわさ わさわさ・・・・・・・・。

海老たちはひとりきわ赤く輝きはじめ、船底を眩しくくらこに真つ

赤に染めていた。

眩しさに目を開けていられないほどに。

わざわざ わざわざ わざわざ わざわざ・・・・・。

みんなみんな海老になつた。富崎も久保田も海老になつた。
そして僕はとうとう本当に一人ぼっちになつた。

いやだ。

……いやだいやだいやだ。

僕は死にたくない。

海老になりたくないなんかない。

助けてくれ。

誰か助けてくれ。

僕は狂つたように手にしたハシゴでドアを叩きつけた。

不意に船底の電灯が全て消えた。

赤い輝きも一瞬で全部無くなり、窓一つ無い船底は完全に真っ暗になつた。

一点の灯りも無い。

もう何も一切見えない。

僕は悲鳴を上げながら階段から滑り落ちた。

腰まで海老つかりながら階段を手探りで探して昇つた。

素手で思いつきドアを叩く。

ああハシゴが見つからない。

助けて！ 助けて！

声の続く限り叫び続けた。

昨夜はこのドアを内側から叩く音がうるさいくて良く眠れなかつた。軽くあくびをした。

ドアを開けるとむつとしたこもつた生臭い空気があふれ出でくる。こればっかりは毎度のこととは言えなかなれることができない。出口横に付いていたブレーカーを上げ、換気扇のスイッチを入れ直した。

寄港まで約1時間。それまでには大分ましになつてこることだらう。

「……サ、サクライさん」

足元から声がした。

船底の廊下に降りる階段の上部に阿久津がいた。

阿久津は下半身は海老に浸かっているものの、上半身を階段で支えそれ以上沈まないようにしている。

一晩中その体勢でいたことは誉めてあげても良いと桜井は思った。

「……サクライさん、たすけてください」

桜井は出来の悪い子を諭すように困つた笑みを浮かべた。

「阿久津さん、駄目ですよ。アンケートの質問に嘘答えちゃ。海老が嫌いなら嫌いって言つて下さいよ」

「桜井さん、お願ひです。助けて下さい」

「まあ、でもそれもこちらのミスですね。しそうがないですよね。予定していた人数が集まらなくて今回は体重重視で集めましたか

51°

準備不足ではありましたね。すいませんでした。

阿久津さん。その点はお詫びさせていただきまーす

「ほー、ほー、誰にもなにも言いませんから、おねがいです。助けて下さい」

阿久津は必死に桜井に助けを求めていた。

桜井はしゃがみこみ阿久津の目を覗き込んだ。

「海老が食べられなくて本当に残念でしたね。でも最初にそう言ってくれればこのツアーにはお誘いしませんでしたよ」

桜井はここの数日間で一番の微笑みを浮かべた。造り笑顔でない本物の微笑み。

今回は本当に苦労も多かった。でもその苦労も無駄ではなかつた。これほどの大漁になるとは。うれしい誤算だ。

「めんなさい、助けて」

桜井はキスをするときのように阿久津の頭に手を回した。

桜井の髪の毛が阿久津の頬に触れあのうつとりするような香りが阿久津を包んだ。

阿久津はこんな時だといふのに顔を赤らめた。

桜井の唇が触れんばかりに近い。

阿久津も手を伸ばそうとしたがもう身体は動かなかつた。二人はじつと見詰め合つ。

そしてそのまま、すくつと桜井は立ち上がつた。阿久津の頭を抱えたままで。

熟れた果実が枝からもぎ取られるように、阿久津の首はぶつりというかすかな音をたて身体から離れた。

首を失った身体は全ての統制を失ったように階段からずり落ちる。と滑り落ち、瞬く間に海老の海へと沈んでいった。

「迷惑をおかけしました。阿久津さん。今回は本当にお世話になりました」

「助けて下さい、助けて下さい」

阿久津は自分の状況にまだ気付いていないのだろうか？それとも気付いてわからない振りをしているのだろうか？この状態の頭部はいつたい何を感じているのだろうか？いつもの、これまで何度も何度も考へたことのある疑問が桜井の頭に浮かんだ。

ぼんやりと物思いに耽っていたためか、桜井の腕から少し力が抜けた。

「あっ・・・・・・」

安定の悪くなっていた阿久津の頭部が桜井の両手の間から抜けていった。

「……たすけて……たす……」

阿久津の頭は階段のステップにぶつかり、ぐしゃりと音を立てて粉々にはじけた。

そして数千匹の海老へとばらばらに分解し、他の海老たちに混ざつていった。

わさわさ わさわさ わさわさ わさわさ・・・・・・・・。

生きの良い真つ赤な輝く美しい海老たち。いつも以上の大漁に桜井は大満足だった。

赤海老港觀光課の桜井です。

どうもいつもお世話になります。

予定通り、赤海老、入荷いたしました。
すいません。今回遅くなりました。

そうですね。あまり宣伝はしないんですが赤海老の美味しさは
口コミで広がっているみたいですね。

いえいえ、昔からお世話に成っているところには優先的に回せ
ていただきますから。

それでお値段の方なんですが、サービス期間は終了とこのことで
成ります。

正規料金に成りますがその点はすいません。ご了承くださいませ。
ええ、ええ。

お昼までにはお届けできると思いますので。
え？ 次回ですか？

そうですね。あまり日を空けずに入荷したいと思つて
るどねえ。

いろいろ下準備に時間が必要でして。
申しわけ有りません。

はい、今後とも赤海老をどうかよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6671d/>

海老

2010年10月9日06時09分発行